



多治見市文化財保護センター企画展 私たちの子ども時代



平成25年7月23日(火)～12月27日(金)

場所：多治見市文化財保護センター展示室

〒507-0071 岐阜県多治見市旭ヶ丘10-6-26

TEL(0572)25-8633 FAX(0572)24-5033

URL <http://www.city.tajimi.lg.jp/bunkazai/>

開館時間：午前9時～午後5時

休館日：土・日・祝日 入場無料

主催：多治見市教育委員会

はじめに

平成に生まれ育った世代が社会に出て働き始め、数年が経過した。「私たちの子ども時代」展を企画・担当している学芸員も平成元年(1989)生まれの20歳代である。この平成育ちの20歳代と、その親世代、祖父母世代は、同じ多治見の中で育っていても異なった子ども時代を過ごしてきたのではないだろうか。

本展では多治見で育った子どもに焦点をあてている。平成生まれでありこの数年で社会に出始めた20歳代、高度経済成長期を知る50～60歳代、戦中～戦後の混乱期を知る70～80歳代に子ども時代をどのように過ごしてきたのか聞き取り調査を行った。その結果と合わせ、3世代の子ども時代を儀礼や普段の生活で使用されていた資料とともに紹介する。

また、日本では明治の近代化以降、「子ども観」を具現化する子ども用商品が相次いで開発されてきた。その中でも窯業の盛んな東濃地方と関わりのある子ども用商品として、子ども茶碗があげられる。本展ではこの子ども茶碗についても展示する。

たじみの子どもたち

子どもが成長する中で行われる行事や儀礼の核の部分には「子どもが無事に育ち長生きをするように」という思いがあるともいわれている。日本には古くから続く行事が多く存在し、地域によって異なる形を持ちながら、今でも人々の生活に受け継がれている。しかし人々の意識や社会の変化などと共に大幅に意味が変わったもの、消失したものも少なくはない。

～子どもの誕生～

お宮参り 生まれてから初めて氏神に参拝する行事である。氏子として仲間入りするという意味もあるといわれている。

「一般的には生後30日前後で行いますが、東濃地方では生後110日前後に行うことが多い^{しんら}ため、お食い初めと同じくらいの時期になります。」(新羅神社の欄宜さん)^{ねぎ}

お食い初め 生後100日前後に行われる行事で、初めて本膳(一汁三菜)で子どもに食事を食べさせる真似をするものである。歯固めの石と呼ばれる石を据えることもある。



▲磁器製のお食い初め食器 昭和30年代
ちこぎとうれつ

稚児行列 7歳程度までの子どもたちが着物を着用し、化粧を施され行列に参加する。多治見市内の寺社では祝い事がある時に行われることがある。



▲新羅神社秋祭 昭和44年(1969) 多治見市図書館所蔵

～児童期の行事～

七五三 7歳・5歳・3歳になる子どもが晴れ着を着用し寺社を詣でる儀礼である。

「私も友人も、七五三はやりませんでした。」(83歳女性・広小路町)

「男子は洋服を着ていました。」(54歳女性・笠原町)

「それぞれ7歳・5歳・3歳となる年に、姉・兄と一緒に晴れ着を着て行きました。」(23歳女性・上野町)



▲お宮参り 平成元年(1989)
▼七五三 平成3年(1991)
新羅神社(御幸町)



「新羅神社ではお祝いの時ではなく、毎年、大祭の行列の中で行っています。神様をのせた御羽車を紅白の紐で引くことで、子どもが元気に育つようにという意味があります。」(新羅神社の欄宜さん)

「実際に参加はしていませんが、軍事物資の不足のため供出した普賢寺の鐘が、戦後にまたつくられた時に行ったという話を聞いています。」(75歳男性・大原町)

ひなまつり・端午の節句 現在ではひなまつりを3月に行うか4月に行うかは家庭によってさまざまだが、多治見ではもともと旧暦の3月3日であった。当日は春の遊びの日として村中が仕事を休み、一部の地域では「おがんどを打つ」ともいって子どもたちが家々のひな飾りを見てまわり、ひな菓子やお供えを布製の袋に入れてもらうという行事が行われていた。この習慣は端午の節句でも行われていた。現在の豊岡町や喜多町など一部の地域では、当日の夕方に川へひなを流す習慣もあった。

東濃地方では土雛という陶器製の人形が多く飾られていたが、この土雛が作られるようになったのは明治時代の中頃であった。昭和30年代頃まではひな飾りの中心であったと推測されるが、現在土雛を飾る習慣は衰退し、主に衣装着の雛人形が飾られるようになっている。

「この時のお菓子には落雁などがありました。ひなまつりは女子だけが学校でお菓子をもらったので、うらやましかったのを覚えています。」(87歳男性・豊岡町)

「土雛は毎年いくつか購入していました。複数の土雛が飾られ、裏におじの名前が書かれているものもあり、それを消して自分の名前を書きました。」(75歳男性・大原町)

「7段のひな飾りで、その周りにガラスケースに入った単体の人形や、小さい時はぬいぐるみも飾っていたようです。土雛は飾っていません。」(24歳女性・明和町)



▲土雛(舞娘)

～学校生活の中で～

授業内容などは世代によって大きく異なっている。特に戦時中は教練ほふくといって銃を使用した匍匐前進などの訓練も行われていた。

入学式・卒業式 入学や卒業は現代の子どもたちにとっても大きな節目となる行事である。現代の卒業式ではそれまでの定型にない工夫をしていることがある。



▲運動会 昭和30年(1955) 多治見市図書館所蔵

運動会 多治見市域で最初の運動会は、明治21年(1946)の5月に行われた可児郡南部四校連合運動会である。この計画が発表されると子どもの衣服購入を心配したり、天候の心配をしたりと大変な反響が起こったという。

「小学校1・2年生までは運動足袋を履いていましたが、その後だんだん物が無くなってきたため足袋を買うことができなくなり、裸足で運動をしていました。」(83歳女性・広小路町)



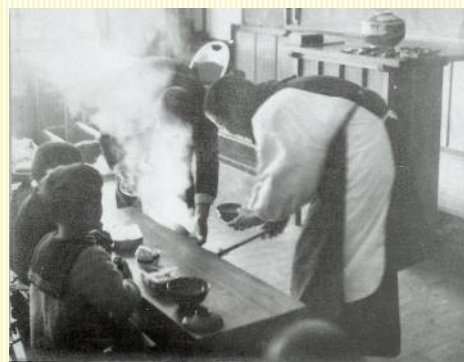
▲昭和27年度(1952)卒業記念 多治見市図書館所蔵

学校給食 終戦後、池田小学校や市之倉小学校では、大豆やさつまいもなどを作り、収穫時には給食として全校児童に支給していたが、その回数や分量も少なく食糧不足を補うには程遠い状況であった。多治見市では昭和22年(1947)、アメリカの機関から豊富な種類の食糧が寄贈されるようになり、週2回程度の給食が開始されるようになる。昭和26年(1951)からは完全給食が小学校で実施されるようになった。

「大根と味噌を持ち寄って、婦人会の人たちが味噌汁を作ってくれました。ご飯は持参しましたが、中にはもってこられない子もいました。」(75歳男性・大原町)

「主にパンが給食に出ていました。ご飯が出たのは6年生の時で、ビニールに入ったものが試験的に出された程度です。」(51歳女性・御幸町)

「陶磁器の食器を給食で使用していましたが、全国的なものだと思っていました。」(23歳女性・上野町)



▲給食の様子 昭和24年(1949) 多治見市図書館所蔵

～成人～

戦前までは男性にとって徴兵検査が大人になったと感じる大きな節目であったとされる。現在では20歳で男女ともに成人式が執り行われており、女性は振袖・男性はスーツで出席する場合が多い。

「徴兵検査では女性も検査の手伝いをしていました。身長や体重をはじめ胸囲、性病・痔などの有無を裸になって検査しました。」(87歳男性・豊岡町)

子ども観の誕生と商品開発

中世ヨーロッパでは、母親や乳母の助けが要らなくなる年齢になった子どもは、身体的に小さいこと以外に大人と大きな違いがあるとは考えられていなかった。それがしだいに無垢な存在として考えられるようになったのは、17世紀から18世紀にかけて家族と教育が発展していく中でのことである。一方、日本では江戸時代以前、時代や地域・階層などによって子ども観は様々な考え方をされていた。それが明治時代の急激な近代化政策の中でヨーロッパの影響を受けながら、学制の公布(明治5年・1872)などにより統一された「児童」として標準化され、子どもは純真無垢な存在であるという新たな子ども観が普及していくこととなる。

この明治の近代化以降、子ども観を具現化する子ども向け商品が都市部の百貨店などから相次いで開発される。「こども博覧会」が明治39年(1906)にはじめて東京と大阪で開催され、様々な子ども向け商品が出品された。日本で最初に子ども向け商品の開発部を設立したのは、三越呉服店(現在の三越百貨店)である。この博覧会とほぼ同時期の明治41年(1908)に「子供部」を新設し、玩具や食器などを開発・販売した。

東濃地方の子ども茶碗



▲磁器上絵子ども茶碗(花咲かじいさん)
昭和20~30年代頃

子ども茶碗はそのほとんどが上絵付という技法(一度釉薬をかけ焼いてからその上に絵を描き焼き付けたもの)により加飾され、カラフルな絵柄が特徴の1つとされる。戦前は昔話の登場人物や玩具、犬などの動物が描かれることが多かったが、戦争が激しくなった頃には日章旗や軍に関するものなど戦争関連の絵柄が描かれるようになった。

明治の近代化の中で開発されてきた子供向け商品の中で、古くから窯業の盛んな地域である東濃地方と関わりがあるものとして子ども茶碗をあげることができる。「岐阜県東濃地方で生産された子供用飯茶碗の基礎的研究」(山内美和氏)には、子ども茶碗については近世以前に発掘資料、文献資料ともに特定できるものが見当たらず、明治33年(1900)の『荷造賃金改正早見一覧表 多治見陶磁器商組合用品』にて初めて記録をみることができると記載されている。また、子ども



▲判帳 昭和14年 多治見市図書館所蔵
ゴム製の判子を使用した絵付け方法に使用する『花咲かじいさん』の文様が押されている。



▲磁器上絵子ども茶碗(サスケ)
昭和40年代頃

～アニメの茶碗と著作権～

子ども茶碗の中でもテレビアニメなどを題材にした茶碗はその当時に流行した番組などが採用されている。戦後しばらくすると、漫画や映画のキャラクターなどが描かれた茶碗が増加しはじめ、昭和30・40年代頃にはテレビの普及もあり、子ども茶碗をはじめとした様々な子ども向け商品にアニメのキャラクターなどが描かれるようになった。しかし、当時著作権の概念も確立しておらず、無許可のまま模倣で描かれているものも多かった。多治見では、市内の業者が昭和34年(1959)から磁器製の子ども茶碗に正式に認証を受けた絵を使用して製造と販売を行うようになった。

「ちょうどカラーテレビが普及し始めた頃で、その当時人気のあったアニメのものを使用していたと思います。」(51歳女性・御幸町)

「茶碗以外に、コップや小さめのラーメン丼もアニメの絵柄を使っていました。」(23歳女性・金岡町)

参考文献

- 浅川範之 2002 「『子ども茶碗』の系譜~近代色絵碗の法量・文様分析を中心に~」(三田史学会配布資料)
石井研士 2005 『日本人の一年と一生 変わりゆく日本人の心性』 春秋社
岩井美和 2007 「岐阜県美濃地方で生産された子ども茶碗 - その形状の変遷と輸出陶磁器との関わり -」『比較人文科学研究年報』No.5 名古屋大学文学研究科
倉石あつ子,小松和彦,宮田登 2000 『人生儀礼事典』 小学館
小泉和子 2002 『ちゃぶ台の昭和』 河出書房新社
多治見市 1987 『多治見市史』 通史編下
多治見市教育委員会 1956 『学校給食 年間の献立』
フィリップ・アリエス 1980 『<子供>の誕生 アンシャンレージュ期の子供と家族生活』 みすず書房
福田東久 2007 『雛まつり 親から子に伝える思い』 近代映画社
山内美和 2006 「岐阜県東濃地方で生産された子供用茶碗の基礎的研究」(未刊行)



▲土雛(浦島太郎)

〈謝辞〉(順不同・敬称略)

株式会社金正陶器・新羅神社・多治見市図書館郷土資料室・調査にご協力頂いた多治見市民の皆様

多治見市文化財保護センター企画展

「私たちの子ども時代」

2013年7月23日発行

発行 多治見市教育委員会・文化財保護センター

〒507-0071 岐阜県多治見市旭ヶ丘10-6-26

電話(0572)25-8633 FAX(0572)24-5033